

「ある作品に見た女性と私の作品について」

大黒愛

気狂い女が踊りながら通る。

その面立ちはもう人間の顔とおもわれずはいえなのように、かわいた笑い声をたてている。

ばらばらな文句の切れ端を口から出まかせにしゃべり、ポプラの葉のように前に前にと歩いてゆく、

砕けた知性の霜をとおして無意識な能力の渦巻のなかにそれを時々かいまみているだけなのだ。

生れついた優しさも美しさもみんな失い足どりもはしたなく、臭い息をしている。

この地上で幸福なことがあるとすれば、その時は驚いてもいいだろう臭い息をしている。

しかし気狂い女は非難ひとつしない。

身を嘆き訴えるにはあまりに誇り高く彼女に興味をもつ者たちに言葉をかけられるのを決して許さなかった。

そして、その秘密をあかさないままで死んでゆくであろう。神の摂理はいかにかと？